経済を見る眼

今週の眼

早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授
川本裕子
かわもと・ゆうこ●東京大学文学部卒、オックスフォード大学経済学修士。1988年マッキンゼー入社。95～99年パリ勤務。大阪証券取引所社外取締役。近著に『川本裕子の時間管理革命』（東洋経済新報社）、『日本を変える』（中央公論新社）。

透明なルールの下での〝金メダル〟

ウインタースポーツの一大イベント・トリノ五輪。女子フィギュアスケートでは、荒川静香選手が、日本選手として史上初の金メダルを獲得し、大輪の花を添えた。

この快挙の背景には、審判の中立性への疑問に端を発した競技審査のルール変更があったと指摘されている。すなわち、演技の採点方式が、裁量性の高い相対評価から、各種の技ごとに明示される客観的基準に基づく絶対評価に変わったのだ。

荒川選手は多くの技で難易度の高い、高得点が取れる技術を磨き、五輪の場で正確にそれらを演じて見せた。客観的な評価点の積み上げにより、他の選手を引き離した。

これまで、欧米中心の芸術的感覚の判断が、日本選手にとっては見えない壁になってきた。1988年のカルガリー五輪の女子フィギュアで、優美な演技で観衆を魅了する東ドイツのカタリナ・ビット選手に、日本の伊藤みどり選手が総合点ではるかに及ばなかったことは今でも脳裏に残っている。当時、筆者は英国オックスフォード大に留学中で、大学院の友人でアイスホッケーの選手だったカナダ人たちと一緒に食堂でテレビ観戦したが、彼らは口々に「ミドリ・イトーのジャンプは技術的に文句なく最高だ」と言っていた。

トリノ五輪での新採点方式は、公平性を高めることにより、競技で勝つために何を目指すべきかという明確な指針を選手に与えたのだろう。選手が能力の限り技術を高める動機が強まった。高度な技術性に加えて優雅で華麗な荒川選手の演技性には、目の肥えたトリノの観衆も喝采を惜しまなかった。

このように考えて来ると、ルールの公平性、透明性は、競争をフェアなものとし、競争の質を高める結果になることがわかる。

これとまったく同じことが、経済でも言えるのではなかろうか。

株式市場などが好例だ。株式市場では、投資家が企業の動向を常に見守っている。消費者や取引先のニーズにしっかり応え、売り上げや利益を伸ばしている企業、従業員のやる気を高め、次々とヒット商品を出している企業には人気が集まり、株価が上がる。企業の株価が高まればその企業は資金調達がしやすくなり、ビジネスチャンスを広げる可能性がさらに高まる。その意味で、株式市場は、株価によって勝負をしている企業間の競技の場といえるだろう。

企業の競争はフェアでなければならない。公平性、透明性の高いルールの下でこそ質の高い結果が生まれる。オリジナルな市場価値の創造によって業績を伸ばす企業とそうでない企業の間で差が出なかったり、見せかけの成果によって勝ったりできる市場では、いい企業が成長せず、経済全体としても伸びていかない。

日本の株式市場は、企業の事業部門別の収支など、欧米に比べて透明性の低い部分がまだまだある。会計監査の中立性も改善の余地がある。

自治体が出資している第3セクターの収支など、日本経済の透明性の低い部分は「官」の部門になお集中している。この面でもフェアな扱いが必要だ。

市場ルールの透明性を高めることに対して、日本の経済界には心理的な抵抗がまだ強いようだが、フィギュアスケートの例は、公平で透明なルールの下での競争が日本企業の実力を高めることにつながることを示唆しているように思われる。経済もスポーツに負けてはいられない。